

地域景観認識の表現媒体としての絵図 —岐阜県恵那市での試みから—

佐々木 葉¹・長谷川 智也²

¹正会員 博士（工学）早稲田大学創造理工学部社会環境工学科
（〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1, E-mail:yoh@waseda.jp）

²非会員 修士（農学）株式会社プランニングネットワーク
（〒114-0012 東京都北区田端新町3丁目14-6, E-mail: Tomonari.Hasegawa@pn-planet.co.jp）

地域の景観の議論や計画に際してどのような媒体を用いるかは極めて重要である。地図と写真では表現しきれない地域特性を記述する媒体として絵図がある。本稿では岐阜県恵那市の景観計画策定の過程で実際に絵図を作製し、その描画方法と作製された絵図に対する考察を述べる。絵図は、地形図、空間構造のダイアグラム、イメージマップなどの複数の媒体で表現される情報を統合して直感的把握を可能にする媒体であり、景観まちづくりにおける複数の役割が期待される。

キーワード: 絵図, 景観計画, 地域認識, まちづくりツール, 表現媒体

1. はじめに

景観法に基づく狭義の景観計画であれ、地域の景観をどのように作っていくかという広義の景観計画であれ、その具体的な作業においては、何らかの媒体を必要とする。通常は地図と写真という最も手軽で一般的な媒体によって現状の景観調査を行い、将来的な目標は、言葉やダイアグラム、地図、スケッチ、写真、図面といった媒体によって提示されている。景観資源の分布や景観計画のためのゾーニングは地図によって、場所の景観形成イメージについてはスケッチや断面図あるいは透視形態や要素の姿形によって表現される¹⁾。あるいはコンピュータ・グラフィックスが用いられることもある。いずれにしても、どのような媒体でどのような表現を行うかは、景観計画の目的や対象地の特性に応じて工夫が必要であり、それは計画の内容自体と不可分であるといえよう。

また一方、景観論の立場から、カメラで撮影される静止画としての写真、あるいは透視画法的な捉え方では人々の景観体験を十分に記述できず、とくに現代の景観を議論するには不十分であり、複合的で多視点的な景観の記述手法が必要であるということが、著者の継続的な問題意識である²⁾。そこで著者らは、平成21年度に岐阜県恵那市の景観計画の検討の一環として地域絵図の作製を試みた^{注1)}。その実践結果に基づいて本稿では、地域の景観計画検討という文脈のなかで用いる地域絵図の作製の方法を提示すること、景観の記述の媒体としての絵

図が有する特質を考察することを目的とする。

2. 絵図と景観に関する既存研究

まずここで、本稿における絵図の定義を、「一視点からの眺めでは把握しきれない面的広がりを持つ空間の視覚的様相を描画したもの」とする。したがって風景画や江戸名所百景のような、ある固定した視点からのシーン景観に近いものはここでは除外する。それは著者の関心が、ある一定の移動を伴う景観体験およびそれに基づく地域認識を記述することにあるためであり、「絵」としての眺めだけでなく、「図」としての位置関係の認識が表現されているものを対象とするためである。もちろん景観計画という地域空間計画における利用という目的のためでもある。そのような文脈では絵地図も用いられるが、絵地図は、基本的には地図の上に立体的・透視形態的な絵を配置したり、道などの地図の構成要素の表現を立体的に描くものと考え、区別する。なお絵地図においてもベースとなる地図のデフォルメの仕方によっては、絵図に近いものもある。さらに鳥瞰図にも絵図と呼ぶものもある。

景観研究において絵図を対象とする場合には、その問題意識において以下の3種があると考えられる。

①絵図という表現媒体の特性から景観認識の構造を明らかにしようとするもの

透視画法的ではない景観認識の構造としてハイパーテキスト構造を絵図の表現に見出した研究として、柳川・仲間（1996）³⁾がある。また堀田（2009）⁴⁾は、吉田初三郎の鳥瞰図を対象として個別の絵図の分析を超えてそれらが描かれた時代の風景認識、社会認識を浮き彫りにすることを試みている。

②絵図に描かれている対象空間の特質を明らかにしようとするもの

絵図に描かれていた対象自体に興味をもち、そこに何らかの規範性や典型性、あるいは歴史的記録性をもとめ、描画対象空間を分析するために絵図を用いる研究として、江戸名所図会から水辺のデザインを分析した橋本・堀（1999）⁵⁾、吉田初三郎の絵図から官庁街の景観分析を試みた松浦健治郎（2006）⁶⁾、あるいは雪舟の山水図巻から理想的な風景の型の分析を試みた研究として真木・和田（2010）⁷⁾がある。

③計画策定のツールとしての絵図を活用しようとするもの

特に住民参加のプロセスにおいて絵図的な表現、あるいは絵地図を用いる試みおよびその有効性に関する研究として、三宅・後藤（1995）⁸⁾、倉原・延藤（1992）⁹⁾などがあるが、これらで用いられるのは作製が容易な絵地図や起こし絵であり、①②で対象とされるような絵図を住民が直接作製あるいは用いる例は管見では見られない。一方計画のプロが描く例は多く、佐藤他（2006）¹⁰⁾などでその例が示されている。

その他、学術研究としてではなく、楽しむことを目的として編集された文献として、パノラマ地図や絵図について紹介したもの¹¹⁾¹²⁾がある。そこでは、高度な技術を用いてパノラマ地図や鳥瞰図を作製する絵師の考え方や方法が記されており、参考となる。

3. 岐阜県恵那市での実践

(1) 恵那市の景観計画の概要

著者は平成20年度より岐阜県恵那市の景観計画策定に関与してきた。市担当職員との議論を重ねるなかで、景観を支える地域の暮らし、生業、環境の保全・再生と向上を景観計画の目標とし、総合計画をビジュアル化したものが景観計画である、という認識で策定に臨むに至った。また合併後恵那市は地域自治区制度を採用し、地域ごとのまちづくりを推進しているため、地域別景観計画を先行して検討することとした。そこでは、a)地域の将来像の視覚化とb)地域の景観構成要素の基調の提示を目標として、住民参加による議論を行うこととした。そして平成21年度に、日本大学、岐阜大学、京都大学、早稲

田大学が参加して恵那市南部の4地域（岩村富田地域・岩村城下地域・山岡地域・明智地域）でワークショップ（以下WS）を行い、地域別景観計画案をまとめた^{注2)}。4地域はそれぞれ特色が異なるが、基本的に表-1のような構成のWSを開催した。このうち山岡地域についての結果と成果については、岡田他（2010）の報告がある¹³⁾¹⁴⁾。恵那市の景観計画は現在まだ作成中であり、全体像が確定した時点でその特色についてまとめるつもりであり、本稿では絵図に関わる部分について述べる。

表-1 恵那市地域別景観まちづくWSの概要

WS	中心的なグループ作業	主な資料
第1回	まち歩き (山岡のみ地図上での検討)	まち歩きコース地図
第1回宿題	自分の気になる風景の写真撮影	使い捨てカメラと記録用紙
第2回	景観資源の抽出と確認・評価 (山岡のみ車で現地確認)	宿題で集まった写真一覧・地図
第2回宿題	地域にふさわしい要素の写真撮影 将来ヴィジョンを語る作文	使い捨てカメラと記録用紙
第3回	地域の将来ヴィジョンの議論 景観づくりのためのアクションプランの議論	景観資源を示した地図・写真一覧 地域絵図
第4回	地域の景観計画骨子の議論	景観計画案・地域絵図・風景カタログ
4地域合同+全市対象 報告会		WSニューズレター 地域絵図

(2) 地域絵図作製の意図

(1)で述べた特色を有する恵那市の景観計画では、地域の現状と望ましい将来像を人々が景観としてイメージできることが重要となる。その際のイメージとは、個別のシーンではなく、地形などによって規定される空間構造と土地利用に根ざした生活の場の同定、さらにそのリアルな体験の記憶とそれに伴う価値と意味である。つまり、景観体験をベースとした地域認識といえる。また景観まちづくりとは、以下のステップを踏んでいくことだと考える。すなわち、①景観的な地域認識を明確にする、②それを共有する、③問題点を理解し、④それを解決した将来目標を明確にし、⑤共有し、⑥その実現のための方策を考え、⑦行動を起こすこと、である。このプロセスのスタートとなる①および②に対して、景観的な地域認識を記述する媒体が必要となり、ここでは、a)マクロな視点から地域絵図を、b)ミクロな視点から景観構成要素の集積としての風景カタログを作製することを考えた。地域の景観特性を考えるには、空間構造に根差した側面と、その空間に存在する要素に根ざした側面との双方が必要であると考えたためである¹⁵⁾。通常前者には地図が、後者には写真が用いられるが、本稿では前者を絵図によって描くことで、地域認識の直感的把握可能性と共有可

能を高めることを意図した。

(3) 絵図の作製手順

絵図の作製には卓越した描画能力が必要とされ、容易に描くことができるものではない。そこで地形データをもとにした下図としての地形骨格図をCGにて作製し、それを下絵として、地域住民のイメージにそったデフォルメを行い、さらにWSで抽出された地域の景観資源や特記すべき場所などを書き加えることとした。以下にその手順を示す。なおこの一連の作業は長谷川によるものである。

①描画範囲の設定：

縮尺一万分の一の白図を用いて、地域ごとの状況とWSでの意見等に合わせて描画範囲を設定する。

②地形データをもとにした地形下図の作製

恵那市提供の1/2500, 1/5000のDMデータを合成して地形データを作製した。そこから等高線を抽出して3Dモデルを作製した。次いで等高線のサーフェイスモデル表現のために抽出した等高線からTINを作製する。CGソフト(AutoDesk社 3ds MAX9)を使用した。さらに地形図のマッピングを行い、地形図に示されている土地利用概況や道路などを地形上に表現した。

③強調すべき要素の検討

絵図のスケールを勘案し、以下の項目から絵図で表現できるものを設定した。

- ・WSにより抽出された地域の魅力的な場所、眺望、建物など
- ・地形的な特徴
- ・河川、道路、鉄道など地域の骨格を構成する要素
- ・地域のイメージを強調する橋梁・溜池など

④アングルの検討

各地区のアングルは、地形的な特徴を踏まえ、以下の

項目を考慮して設定した。

- ・景観資源の分布
- ・地域住民の領域感
- ・既往の観光マップの構図
- ・交通網の方向性

⑤景観要素の描画

マッピングした地形図上に、地域景観を構成する以下の要素を描き込んだ。今回は画像編集ソフト(Photoshop)を用いて描画している。スケール上、無視できない要素は全て描画した。なお、建物は現状ではなく棟方向を意識したシンボリックな表現とし、配置傾向が分かる程度の描き方としている。また、景観上好ましくない鉄塔は、描画対象から外した。

- ・道路、鉄道
- ・河川、溜池
- ・山林のケバ表現
- ・水田、畑地などの農用地
- ・建物 住宅、商業施設、公共施設、工場等

⑥絵図全体のイメージと景観的要所の見せ方

景観的な要所は、地形図のスケールに違和感を生じない忠実な描写を基本とした。絵図と遠景の接合部は、変形を抑えて周辺部をぼかしたことで違和感を軽減した。

⑦名称等の書込み

WSで得られた地域の景観資源や視点場等の名称を記入する。

(4) 作製した絵図

以上の手順を経て、3枚の絵図を作製した(図-2)。以下それぞれに表現された地域の特徴と絵図の表現上の工夫を概略的に述べる。

①明智絵図 (図-2 上)

明智川沿いにコンパクトに市街地がまとまり、その周

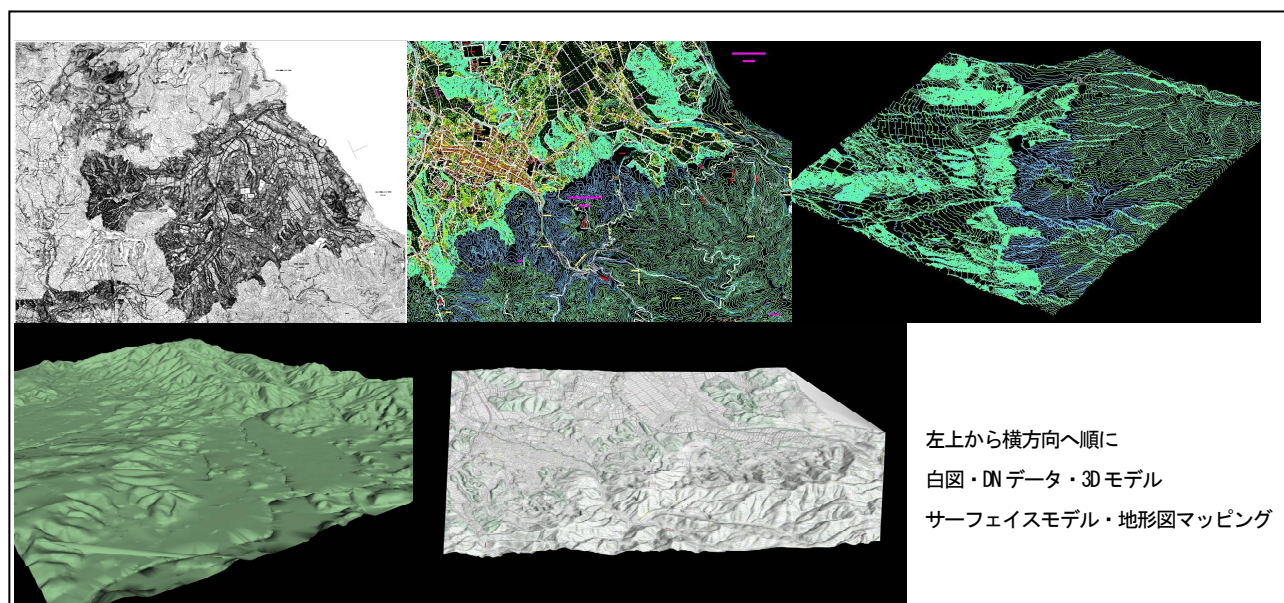


図-1 岩村富田地域の下図作製過程

囲を丘陵が取り囲んでいる。街道沿いの歴史的な町並みと大正村というコンセプトで町づくりを進めてきた過程でつくられた観光資源などが、その市街地に集中している。その外周に自然系の資源、公園、古墳や寺社が点在する。この市街地へいたるアプローチとしては、明知鉄道と吉田川沿いの道がある。さらにその外周に工場と谷筋にそった田園が位置し、それらへつながる道が市街地から伸びている。こうした全体の土地利用状況とその関係性を全体の構図が示し、市街地に集中する景観資源のそれぞれが近づいて見ると読み取れる。明智地域についてはWS参加者の関心が市街地内に集中し、それをとりまく地区との関係性がほとんど議論できなかった。しかし今後のまちづくりでは周辺地区との関係性が重要となると考え、あえて広域を描画し、特に明知鉄道沿いを延長して描いた。

②山岡絵図（図-2 中）

山岡はもともと8つの村が2度の合併をへて一つの地域となっており、地形的構造も明瞭ではない。明智と岩村というそれぞれ特色のはっきりした地域に挟まれて、顔のない、つかみどころのない地域といわれていた。それに対してWSと岡田らの現地調査によって、洞という空間単位に着目すること、洞をつなぐ河川と道に着目すること、それらによって大まかな地域の骨格構造を浮かび上がらせ、その上に記憶に残る眺めとして産業活動や駅、遠方の山並などを位置付けることが行われた¹⁶⁾。こうした地域認識は、今回初めて地域にもたらされたものであり、「なるほどそうだったのか！」と膝を打つ感覚が地域住民にもたらされた。絵図においては、洞を強調する水田への着色とつながり要素の強調、および記憶に残る場所の位置の明確化によってその構造を表現している。またこうした構造が明らかになってきた最終段階で、地域住民から絵図の方向を反対にしてほしい（南が上だったものを北を上）という要望が出され、そのように修正した。遠方の山並に対しては恵那山のみ、絵図端部に描いた。

③岩村・富田絵図（図-2 下）

岩村地域では土地利用の異なる富田（農業地域）と城下（市街地）で別々にWSを行い、絵図についても当初はそれぞれについて描いていた。しかし、将来のまちづくりにおいては双方の補完的協調とインフラの有効利用が必要であると考えたこと、また地域住民にも小学校が共通であるといった連帯意識が潜在的にあることがWSで確かめられたため、二つの地域を合わせて描くこととした。両地域を統括する存在が岩村城址であり、山城からの傾斜に沿って農地も町並みも連なっているという地形的な印象を、他の絵図に比べて低く設定した視点からの描画によって表現している。地形図をそのまま立ち上

げると城下の街並は富田の水田の広がりには比して非常に小さくなる。しかし人々のイメージとしては富田と城下が対になっているため、城下の町並みを拡大して描いている。どちらも周囲は山に囲まれているという印象が強く、特に富田ではその景観的重要性が指摘されたため、田を囲む山々を下絵の地形の透視形態ではなく、スケッチによって立ち上げている。また両地区をつなぐ要素としての明知鉄道が強調され、沿線地域としての関係性が明確になった。

以上の3枚の絵図は、何を、どこを、どう描くかについて試行錯誤を重ねながら作製したものである。そこではWSで住民が指摘する事項をベースとしながらも、各地域を担当した大学教員が景観プランナーとしての立場からこのように描こうという意図も反映されている。逆にいえば、当該地域をどのようにとらえ、どのような将来目標を立て、そのためにどのインフラや空間を活用していくかを戦略的に議論することが、絵図をどのように描くかの議論と同時並行で行われた。

4. 絵図と地域景観認識

(1) 地域景観認識の構造と絵図という媒体の特徴

文献11)12)などに見られるようにパノラマ地図や鳥瞰図と呼ばれるものは数多く存在する。ここでは、たとえば、「理想の鳥瞰図を作成するとき、「地図であること」「景観図であること」「絵画であること」という3つの要素が不可欠であると思われます。「地図」は地形の形状を含めた情報量やその正確さ。「景観」は題材や場所、見る方向や見せ方。「絵画」はその芸術性。それらがバランスよく組み合わせられ、見るに耐える鳥瞰図となるはずです。」¹⁷⁾といわれている。確かに参考にはなるが、本稿で最も重視するのは、絵図による明瞭で魅力的な地域認識が可能となることである。景観体験にもとづく地域認識とは、K. リンチの都市のイメージ¹⁸⁾で論じられていることであるともいえる。つまり人々が、ここやあそこ（elementとidentity）それらの関係（structure）、そして意味（meaning）を視覚的イメージを伴って想起することができれば、地域認識（imageability）ができていといえる。そこでここでは、リンチによる都市のイメージに関する論との対照も含めて、絵図という表現媒体の特徴について考察する。

①全体の印象

まず絵図を見た時の第一印象は、その全体のトーンである。3地域とも緑色が卓越し、自然に囲まれた地域で

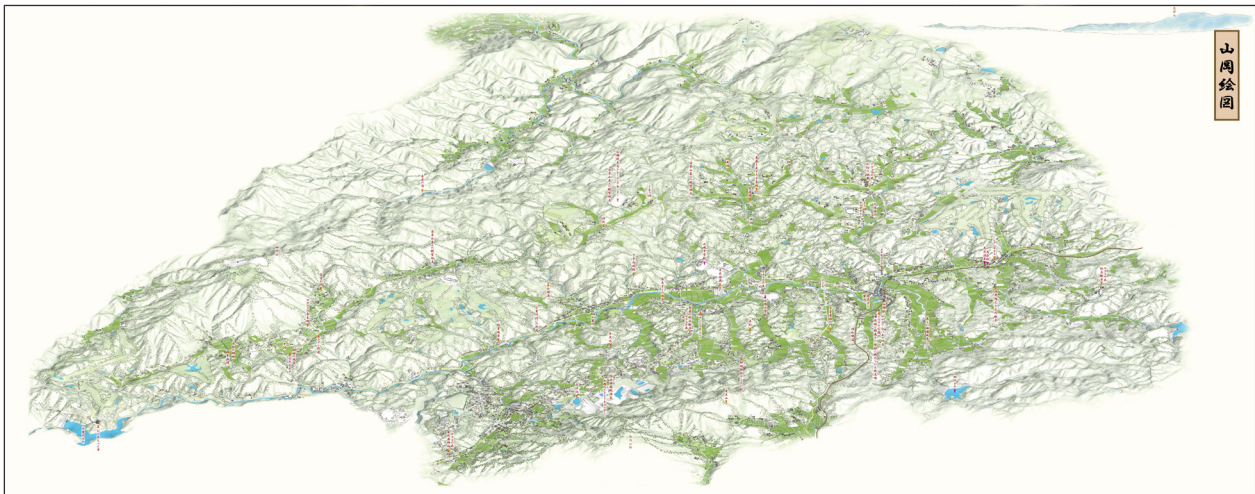
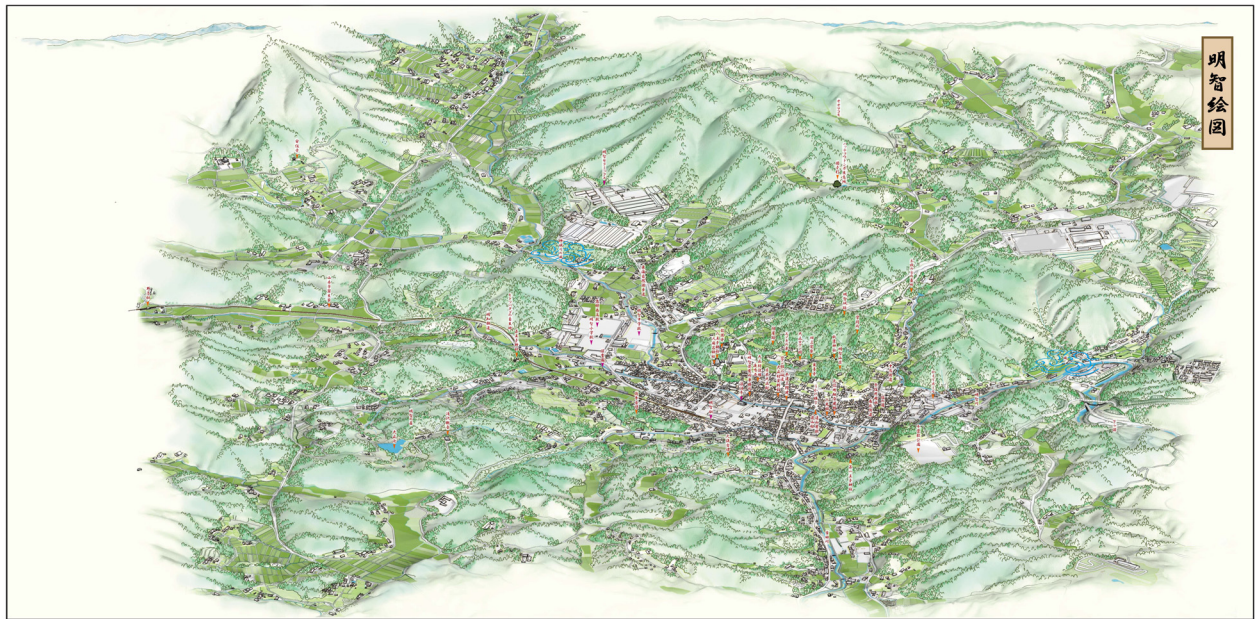


図-2 作製した地域絵図

あることを直感できる。さらに樹木のテクスチャが描かれた山林部とフラットな緑に塗られた水田とがあやをなす田園地域であることがわかる。その中に家々が集まる集落、市街地がある。こうした地域を構成する土地利用の種別が、絵図全体のトーン、テクスチャとして伝えられる。

②マクロな定位

次にここはどこだ、という位置を把握する手掛かりとなる要素に目がいく。全体のなかで識別しやすい要素であり、明智では市街地（district）が卓越する。富田・岩村でも城下（district）、さらに奥行感をもって貫く明知鉄道（path）と岩村城址（landmark）が識別され、富田の田園（district）、遠方の山並（edge & landmark）が識別される。つまりリンチのelementがそれぞれどのような姿形をもっているか(identity)を伴って直感的に把握され、同時にそれらの位置関係（structure）が見て取れる。またこの位置関係が直感的に把握できるかどうかは、どちらの向きから絵図を描くかに大きく関係している。山岡において最終的に上下反転の要望が出されたのは、そのためであると考えられる。

③場所の識別と意味の想起

こうした大まかな定位がひとたび把握されると、絵図の中にズームインしていく。そして文字によるガイドを頼りに、個別の場所や構造物をあれこれと確認していく。ここに駅がある。ここは神社、学校、といった具合である。それぞれには実際の眺めのようにあるいはアイコン的に具象な形として描かれている。そのためそれらへの記憶や意味（meaning）が想起されやすい。今回の絵図には物理的な空間構成要素のみが記載されているが、一部明智絵図では風が描かれている。このあたりから風が吹き下ろしてくる、という経験に基づく場所のイメージの表現である。人の活動などを描きこむことでそれぞれの場所の意味の直感的想起を促すことが期待できる。

④仮想行動の誘発

絵図に描かれた空間に入り込み、そこを移動するような仮想行動によって、関係性の理解が促進される。ここをこっちにずっと進んで、ここからぐるっとまわって、というイメージは特にpathの要素が導く。明知鉄道に描かれた車両は仮想行動を一層促し、川の水色は水の流れを強調する。こうした移動が地域内の骨格構造や要素の関係性(structure)の継時的な理解につながり、そのプロセスで遭遇する目印となる要素(nodeやlandmark)が位置づけられる。②のようなマクロな定位が難しい山岡において特に顕著である。

⑤関係性の意識化

上記のような様々なモードでの地域の骨格構造の認識

プロセスを踏むことで、自分の住まいや地区の位置づけや位置関係が浮かび上がってくるのではないかと考えられる。山岡における並行してなぶ洞群とその中の一つという意識、あるいは、明智における市街地の内外の区分とつながりの関係、富田と城下が対であるという意識などである。これはstructure自体がmeaningをもち、contextとなることだと解釈できる。

以上のように絵図は、地形図、土地利用図、施設配置図、空間構成のダイアグラム、リンチの5つの要素を配したイメージマップ、個々の場所で撮影した写真などといった複数の媒体によって表現可能な情報を統合しており、これを眺めることでそれらの相互に関係した情報を直感的に把握できると考えられる。こうした把握が可能であるのは、絵図が有する多視点性と多面角性によるといえよう。さらに地域の全体的なイメージやカラー、トーンと呼び得るような雰囲気も、文字通り絵図の色調やテクスチャによって伝えられると考えられる。

(2) 景観まちづくりにおける絵図の役割

仮に(1)で述べたような特性を絵図が有すると考えた場合、広義の景観計画、つまり景観まちづくりにおいて絵図には以下のような役割が期待できると考える。

①整備対象とその方針の検討

これから地域整備として、あるいは景観整備として何をやって行けばよいのか、どのようにやって行けばよいのかを検討する際に、それが絵図の中でどのように描かれるかを想像することで、その整備の景観的効果を想定することができる。リンチのイメージマップは景観計画においては、イメージの弱い部分の補強といった方向性を導くために利用されるが、同様なことを絵図ではよりリアルに検討できる。あるいはまた、何らかのインフラ整備の必要が生じたときに、その景観的影響も絵図中で検討することができるだろう。たとえば富田・岩村において、富田と城下双方で観光バス用の駐車場が欲しいという意見があった。各々の地区内で確保するのではなく、両地区をつなぐ県道沿いにうまく収めて配置することで景観的影響が低減するとともに利用の連携が図られ、さらにそこを起点にシャトルバスを巡らせるルートを絵図の中に描くことがイメージできる、といった具合である。地形図や用途区分図のように空間情報についての正確性は絵図にはないが、ダイアグラムよりはイメージがリアルである。地域の将来ヴィジョンとしての景観計画の検討とそのための方策の検討には、空間性と具体性を同時に扱える絵図は有効であると考えられる。

②地域の景観の規範の穏やかな提示

景観形成には景観構成要素のコントロールが必要とな

る。そのため景観法に基づいた届け出制度を用いて、景観形成基準を適用することが各地で試みられている。しかしその苦悩は明らかであろう。形態意匠についての基準を具体的に客観的にすればするほど合意が得られづらくなるだけでなく、映画のセットのような奇妙な雰囲気町の町並みになる。恵那市の地域別景観計画検討では、景観構成要素の基準に対しては風景カタログを考えており、絵図はマクロな地域空間構造の検討を当初目的としていた。しかし絵図自体にも、全体の描画のトーン、書き込まれる建物の形態によって、全体としてその地域の望ましい景観の規範を緩やかに提示するという役割があると期待される。何かにつけてこの絵図が使われ、地域住民の目に触れることで、地域において「自分の町はこんな感じ」というイメージが形成される。それが共有されていけば、それを大きくはみ出す要素の出現に対しては自ずと違和感や反発が生じる、と期待したい。

③参加意識の醸成

絵図にはすべての家が描かれているわけではない。しかしかなり忠実に家屋の配置が再現されている。地域住民はその中に自分の家（と感情移入できるもの）を見出しやすい。地図に記載される平面ではなく、立体的で屋根をもった表現は、生活のイメージを想起させやすい。実際長谷川は、地域の方々が地域に生かされているという印象を感じ取ってもらいたいと願いながら描画している。このような情緒的な話がどこまで通じるかは別にしても、地図や衛星写真よりも仮想行動が誘発されやすい絵図を媒体とすることは、地域への帰属意識、まちづくりへの参加意識の醸成へ、相対的にプラスとなるのではないかと考える。

5. 今後の課題

4章で述べたことは、あくまで著者の想定と期待であり、実証されたことではない。したがって今回作製した絵図に対する地域住民の評価、および絵図を見たことによって可能となった地域認識の有無などを実証的に把握することが必要である。3枚の絵図についてもさらに改良の余地がある。その上で描画のテクニックについての取りまとめが必要となる。また景観計画の策定および実際の景観まちづくりツールとしての有効性の検証も必要であり、今後の課題である。

補注

注1) 恵那市の地域別景観計画の検討とその過程での絵図に関する議論は、著者と日本大学岡田智秀、岐阜大学出村嘉

史、京都大学山口敬太の各氏によって行われたものであり、本稿3章の成果はこれら各氏に負うものである。

注2) 平成21年度国土交通省による「地域景観まちづくり緊急支援事業」の採択を受けた「合併後の地域連携を考えた持続可能な景観づくり計画と実行プロジェクト」の一環として行った。

参考文献

- 1) 川田武尊・佐々木葉：景観計画における地域資源図の特徴と表現，土木計画学研究講演集，Vol. 41, CD-ROM, 2010
- 2) 佐々木葉：都市景観へのアプローチと表現―脱透視画法的景観論のために，土木学会 景観・デザイン研究講演集 No. 4，355-364，2008
- 3) 柳川正宏・仲間浩一：複合表象としての都市景観に関する研究―江戸名所図会を対象として―，第31回日本都市計画学会学術研究論文集，1996，181-186
- 4) 堀田典裕：吉田初三郎の鳥瞰図を読む，河出書房新社，2009
- 5) 橋本政子・堀繁：江戸の川岸の張り出し・引込みとその効果―江戸名所図会等を分析資料として―，第34回日本都市計画学会学術研究論文集，1999
- 6) 松浦 健治郎：吉田初三郎鳥瞰図に描かれた昭和初期の官庁街の立体的空間構成―近世城下町を基盤とする県庁所在都市18都市を対象として，日本建築学会計画系論文集 (602)，105-112，2006
- 7) 真木利江・和田佳奈美：雪舟による四季山水図巻の空間構成，日本建築学会計画系論文集 (652)，1623-1630，2010
- 8) 三宅諭・後藤春彦：街並み起こし絵図の有効性に関する研究―街並み起こし絵図の評価特性と起こし絵WSへの応用，日本建築学会大会学術講演概要集，97-98，1997
- 9) 倉原宗孝・延藤安弘：計画行為における価値づくりに向けてのまちづくりコンクールの有効既に関する考察―東京都世田谷区、熊本県水俣市の場合，日本建築学会計画系論文報告集 (433)，95-104，1992
- 10) 佐藤滋他：図説都市デザインの進め方，丸善，2006
- 11) 別冊太陽―パノラマ地図の世界，平凡社，2003
- 12) 鳥瞰図絵師の眼，INAX出版，2001
- 13) 川島正嵩・岡田智秀他：拠点分散地域における交流型景観まちづくりに関する考察―岐阜県恵那市山岡町における景観まちづくりワークショップの取り組みから―，土木計画学研究講演集，Vol. 41, CD-ROM, 2010
- 14) 岡田智秀・横内憲久他：岐阜県恵那市山岡町地区における景観特性と景観まちづくりワークショップの成果，土木計画学研究講演集，Vol. 41, CD-ROM, 2010
- 15) 中村良夫・西村浩・山下葉：都市景観のコンテキストとデザイン―歴史的街並を例として，建築保全，No. 45, 81-86, 1986 20年以上前にこの小論で考えていた「空間のコンテキスト」と「風物のコンテキスト」というアイディアが元になっている。
- 16) 前掲14) 参照のこと
- 17) 前掲11) 収録 北海道地図株式会社堤啓：最高の技術は、人間の感性，p. 114
- 18) ケビンリンチ：都市のイメージ，岩波書店，1968